富士見工業株式会社

「もったいない」精神が主力事業への転機に 土本来の力を引き出す『有機堆肥』を生み出した

事業内容

1946年創業
堆肥卸売業
貸コンテナ業
不動産活用事業

知的財産権と内容

特許第5777132号	植物生長促進剤及び植物の生長促進方法
特許第6132524号	農業用資材
特許第5784276号	自然由来の酢液等の酸性溶液を用いた汚泥水処理工法
商標第5360419号	いちごいちえ
商標第6780522号	スマートリッチ

他　商標権32件、特許権2件　（2025年10月現在）

ACTIVITIES & ACQUISITION IS INTELLECTUAL DATA

右：代表取締役社長　山本　正信さん
左：取締役社長室 室長　山本　縁さん

パルプや木材チップの製造を経て 木の皮を活用した「堆肥」事業が主力に

1946年に山本社長の父が創業した当時は、紙の原料となるパルプや木材チップを製紙会社に供給する事業を主力としていた当社。その中で、木材をチップに加工する際に樹皮が大量に処分されるのを「もったいない」と感じた先代は、何かに有効活用できないかと考えを巡らせた。結果、「樹皮を発酵させて堆肥にする」アイデアに辿り着き、国立の林業試験場の技術者から指導を受けながら、1967年頃に製品化を果たしたという。当時、堆肥は農家自ら作るものという認識が一般的だったが、経済農業協同組合連合会（以下、経済連）等の農業指導機関が、化学肥料による土地の劣化を防ぐための「土づくり運動」を推進しており、当社も静岡県を筆頭に各地域の経済連と契約し、有機堆肥の有効性や効率性をPR。温暖な気候ゆえに冬でも農業が行われる地域であることもニーズを後押しし、お茶やみかんといった地元の名産品の農地からシェアを広げていった。その後は徐々に堆肥事業が主力となり、農地だけでなく公園等の公共施設やゴルフ場などの「緑化」にも技術が活用されている。

「権利を守る」ために知財を意識し 20年ほど前からは産官学の共同研究にも力を入れる

当社は先代の時代より「人がやらないことをやる」姿勢で、先進的な技術・商品開発にも積極的に取り組んできた。しかし、製品化を果たすと模倣されやすくなるという課題も生まれ、権利を防衛する目的から特許や商標などの知財への意識も高まったという。本格的に知財取得に力を入れる契機となったのは、20年ほど前のこと。静岡県における研究機関（大学）のシーズと地元企業のニーズを繋げるべく、静岡商工会議所を中心として「産官学」の研究体制を構築するという取り組みに参加したことだった。そこで静岡大学と協力し、微生物研究を応用してイチゴ炭疽病を抑制できる苺栽培に特化した堆肥『いちごいちえ』や、植物の高温ストレス耐性や乾燥耐性を高める抽出液『サーモザイム』を開発。共同出願にて特許・商標登録を行った。また、近年では、繊維質が多く粒状化が難しい牛ふん堆肥を綺麗な粒状に加工した製品の開発にも成功。牛ふんの臭いを抑え、効率的に散布が可能となる製品『スマートリッチ』が注目されている。こちらも静岡県の畜産技術研究所に当社から声をかけ、共同で開発を進めた。山本社長は共同出願の際、「まずは共同者を“尊重する”姿勢を大切に。お互いに役割分担を明確にし、それに沿って行動すること」を心がけているそうだ。

特許の取得が社内全体のモチベーションに影響 ブランディングの観点から商標との知財ミックスも実践

大学や研究機関とも協力して特許技術を開発したことで、取引先に対する信用が高まったと感じる機会も多

い。当社では営業部が顧客ニーズを汲み取り、社内で精査して新規開発に繋げるという体制を採用しているため、知財の担当者でなくとも開発や特許出願に関わりやすい環境にあり、社内全体のモチベーション向上に繋がっている面もあるという。また、特許と並行して商標を取得することで、製品イメージを強化し、親しみやすさや訴求力を高めている。元々は、キャッチコピーやコンセプトがあった方が印象に残りやすいという営業面でのメリットが主であったが、製品の普及が進む現在は、他者に真似されないためにも商標取得が「当たり前」となっている。

知財取得・活用における苦悩

堆肥業界のパイオニアとして新たな風を吹き込んできた当社だが、一方で「先発ゆえに、常に後追いされる立場でもある」と山本社長は話す。模倣被害を受けたことも一度や二度ではなく、だからこそ知財は自社で開発した技術を守るための「防衛策」として大いに役立っているという。その他にも安定した供給力や品質、使いやすさを追求するなど、様々な面で他社との差別化を図っている。また、過去には特許を申請する上で拒絶理由通知を受けた経験もあった。その際には弁理士と知恵を出し合い、専門的な知識をどのように伝えるかも踏まえつつすり合わせを行ったそうだ。

知財取得を目指す経営者へのメッセージ

「大前提として『他とは違うことをしたい』『まだ世に出ていない価値を創出したい』という気持ちがなければ、新しいアイデアは生まれない」と山本社長は話す。「当社でも現場ニーズから共同開発が始まるケースが多いので、まずは課題に目を向けてみては」と続けた。また、「相性の良い弁理士と連携することも重要。こちらの話をよく聞いてくれ、一緒に考えてくれる人を探すのも大切だと思う」とも併せて語った。

『Fujimi』の社名が映えるグループ本社ビルは、2010年に建築された

粒状牛ふん堆肥『スマートリッチ』は、繊維状とやや粒の大きいペレット状を展開

知的財産活用のポイント

「ありがたい、もったいない、世の役に立つ」先代から受け継がれる理念

当社には、先代より「ありがたい、もったいない、世の役に立つ」という理念が受け継がれており、現社長や従業員、後継者の山本縁氏にも根付いている。縁氏は創業80年の歴史と知財を活かした企業価値向上を目指しており、外部コンサルタントにも相談しながら、さらなる知財戦略を検討している。具体的には、特許庁の提唱する「デザイン経営」を参考に、会社のロゴ変更やブランド再構築によるリブランディングと、技術開発によるイノベーションを両輪とした企業価値を高めるための戦略であるという。さらに、地域の学生向けのSDGs教育や探求学習の推進等の社会貢献活動も積極的に行うなど、“循環型社会”の広がりとともに、当社の技術に対する期待も高まっている。

COMPANY DATA

取材：2025年10月

企業名：富士見工業株式会社　**所在地**：静岡県静岡市駿河区富士見台1-21-22　**電話番号**：054-282-2351
URL：https://fujimi-group.co.jp/　**創業**：1946年　**資本金**：3500万円　**従業員**：70名